



写真-1 揖保川に架かる国道 29 号・山崎大橋から上流方向を撮影（令和 3 年 6 月）

■ 因幡街道・船元の渡しは今

写真-1 は、国道 29 号・山崎大橋から揖保川の上流方向を撮影したもので、前方に見えるのが中国自動車道、その向こうに見えるのが宍粟市役所の庁舎です。また、右岸側の河川敷に建っているのは、国土交通省の山崎雨量観測所および山崎第二水位流量観測所です。

観測所の 10m ほど下流には、昭和 52（1977）年 4 月に山崎町（現・宍粟市）と山崎郷土研究会の手で「史跡 船元の渡し場跡」と刻まれた石柱（写真-2）が建てられ、その側面や背面には、渡しの由来や付近の名所旧跡案内が記されています。

■ 船元の渡し由来

写真-2 の石柱の右側面に、渡しの由来として「揖保川は山崎城下防衛の第一線で外堀の役をするので因幡街道の要衝であったが特に橋を架けず渡し舟で往来した。須賀の渡しとも言う」と記されています。

船元の渡しが置かれたのは慶安年間（1648～1652 年）といわれています。それは慶安 4（1651）年の記録しかないことが理由のようで、それ以前は上流の出石の渡しを利用していたと思われます。その頃の藩主は、松平康映（やすてる）（1640～1649 年）、池田恒元（1649～1671 年）のお二人なので、いずれかが藩主のときに渡しを置いたと思われます。

参勤交代の時には、藩主御一行様もここから対岸に渡られています。留守を預かる家老や庄屋はここで見送ったそうです。この渡し場は、昭和 30 年代まで利用されていたとか。



写真-2 「史跡 船元の渡し場跡」

■ 参勤交代にも利用された船元（須賀）の渡し

山崎から姫路への往還にはこの船元の渡しを利用し、参勤交代の時もこの渡し場から川幅 1 町 2 間（≒113m）余の揖保川を舟で渡っています。渡し場としては第一級のもので、渡し舟が 1 艘あり（船造りは領主）、渡し守給（米 10 石 5 斗余と麦 9 石 8 斗余）は、山崎領内の村からと千草谷から 6 対 3 の比で徴収していました。右岸部の「船元」という地名は渡し場の名残りです。

大名の参勤は、慶長 8（1603）年に加賀の前田利長が家康のもとに参勤したのに始まり、寛永 12（1635）年「武家諸法度」によって制度化され幕末まで続きましたが、慶応 3（1867）年、大政奉還と共にこの制度は姿を消しました。

本多氏入封以前の参勤交代については史料を欠いていて定かではありませんが、延宝 7（1679）年以後の山崎藩については、『覚書』その他の『本多家文書』によってその概要を知ることができます。

参勤月については、外様大名は 4 月、譜代大名は 6 月か 8 月と定められていました。池田家を除き譜代大名である山崎藩主の出府は、6 月中旬の江戸城登城に合わせて 5 月中旬に山崎を出発、6 月上旬江戸到着の行程を組んで行われていました。

帰国は、6 月下旬から 7 月上旬に江戸を出発するのが通例だったようです。当時、山崎～江戸間の道中所要日数は 16 日間とされていましたが、河川増水などの交通事情によっては到着日が大幅に遅れることもあったとか。小河川であれば水はすぐに引きますが、大河川であれば水位が下がるのに数日かかることもあります。

山崎藩で藩主が参勤交代するときは、早朝六ツ（午前 6 時）に陣屋を立ち、青蓮寺（写真-4）東の清水口（近所に住むおじさんの話では「近くに清水が湧き出る井戸があったことからこの名がついた。今、井戸は蓋がかけられている。」）を出て、坂を下り右に折れ、少し進んだところにある因幡街道の道標（写真-3）を左折し、稲垣神社（写真-5）前を通り、揖保川堤防沿いに 600m ほど南下したところの船元の渡し場から揖保川を渡ります。そこには下座場が設けられていて、藩士たちが藩主を見送ったそうです。渡りで須賀沢に渡り、飾西、御着を抜けて東海道（時には中山道）を経由して江戸に向かったそうです。



写真-3 因幡街道の道標と石柱

参勤は 1 年交代だったので藩主の生活は江戸中心になり、領国山崎での生活期間は江戸に比べてはるかに少なく、本多氏支配期間 192 年のうち、藩主が山崎にいた年数は 60 年に満たなかったとか。



写真-4 清水口跡の西隣にある青蓮寺



写真-5 稲垣神社

寛政 9（1797）年に建てられた因幡街道の道標の傍に、山崎町（現・宍粟市）と山崎郷土研究会が昭和 51（1976）年 12 月に建てた石柱（写真-3）があり、それには「山崎は古来山陰山陽を結ぶ最も重要な地点で今日の国道二十九号線は昔因幡街道といはれたコースである。鳥取から南下して東を通りを総道神社で東へ折れここから又東へ須賀の渡を渡って安志林田を経、姫路へ達した。」と記されています。

なお、道標の側面には「左 安志、香寺、林田、姫路」および「右 新宮、網干、龍野、室津」と記されています。

船元の渡しで対岸（左岸側）に渡ったところに「須賀の渡し場跡」と刻まれた石柱（写真-7）が立っています。

船元は右岸側、須賀は左岸側の地名であり、それぞれ地元の地名を渡し場名に付けていたようです。

写真-6 の舗装路の先に見えるのが揖保川の堤防です。



写真-6 「須賀の渡し場跡」



写真-7 「須賀の渡し場跡」の石柱

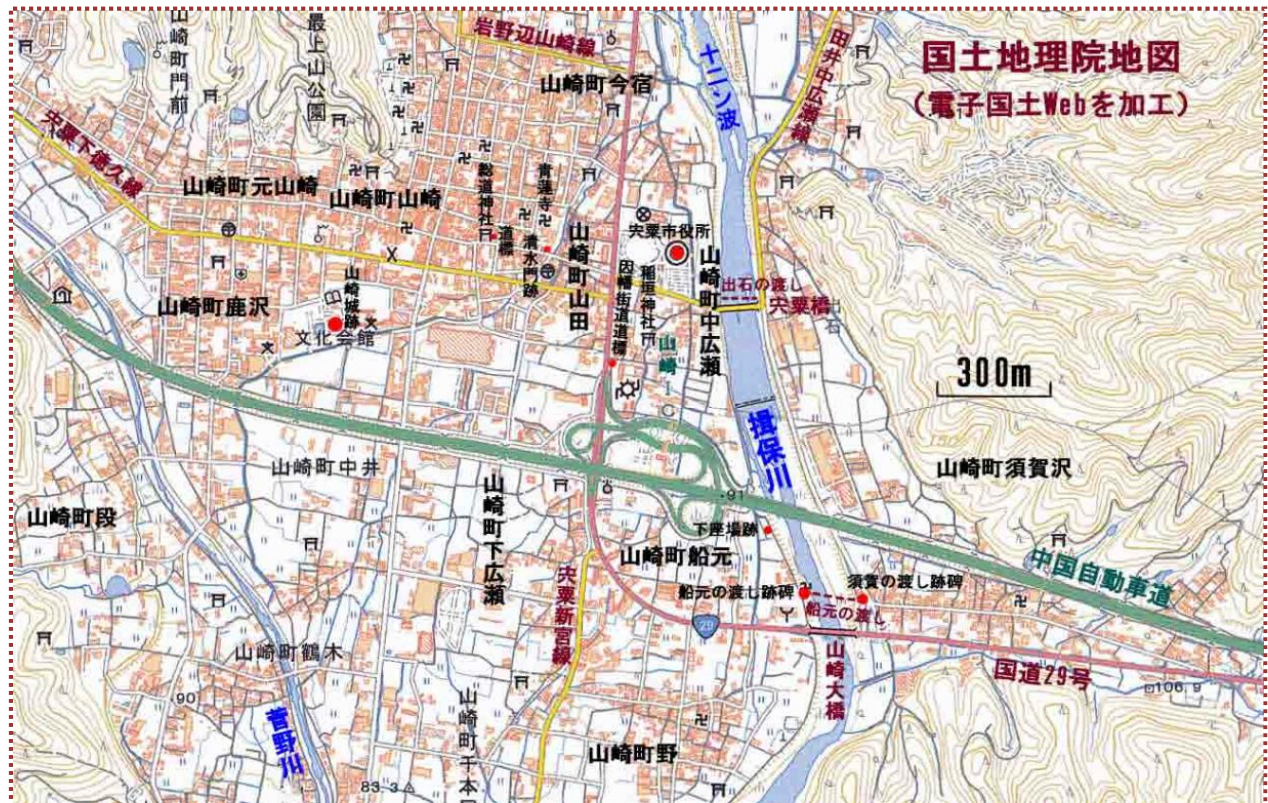


図-1 船元（須賀）の渡し跡付近の地図

■ 石柱に示された渡し場近くの名所旧跡

「史跡 船元の渡し場跡」石柱の背面に刻まれた名所旧跡案内では、「俳聖芭蕉句碑」、「一石一字塔」、「下座場」が紹介されています。

① 俳聖芭蕉句碑

石柱の西数 m のところに、芭蕉の句碑「此道塚」（写真-8）が建てられています。

此の道や 行く人なしに 秋のくれ

石碑に刻まれたこの句は、芭蕉最晩年の元禄 7（1694）年 9 月 26 日の句会で詠んだ句で、場所は文人が集まる大坂の料亭「浮瀬（うかむせ）亭」だったとか。事実上の辞世の句とみられています。なので、芭蕉がこの地を訪れて詠んだ句ではありません。

長い旅の道行きが、間もなく尽きることを悟った故でしょうか。「此の道や」は、芭蕉が辿ってきた「俳句の道」と解釈され、同年 10 月 12 日、南御堂（御堂筋）の花屋仁左衛門宅で客死しています。



写真-8 芭蕉の句碑「此道塚」

この句碑は、万延元（1860）年に45歳で亡くなった二頃庵年足（としたり）という地元の俳人が、安政2（1855）年に俳聖芭蕉を偲んで建てたものと思われます。

句碑の左側面には年足の句が刻まれています。 **澄みきったばかりでもなし 秋の水**

② 一石一字塔

経典を小石に1字ずつ書写したものを一字一石経といい、これを追善供養や水害防止祈願などのために地中に埋め、その上に経名や年月日などを刻して建てた石塔を一石一字塔といいます。

前述の芭蕉句碑の南西数mのところに一石一字塔（写真-9）が建てられています。塔の正面中央には「漸寫（ぜんしゃ）一石一字」と刻まれ、その両側に「大乘妙典」と「并三部経」の文字が刻まれています。「漸寫」は急がないで写経すること、「大乘妙典」は衆生を迷いから悟りの世界に導いてくれる経典で、一般的には法華経、すなわち妙法蓮華経を指すといわれています。そして、「三部経」は大乗仏教の経典群のうち『無量義経』、『妙法蓮華経』、『仏説観普賢菩薩行法経』の三経を指すそうです。

また、背面には「渡海船筏、登夫棧梯」、左側面には「自○寶塔、透徹雲泥」、右側面には「○無價皇」と刻まれています。意味はわかりませんでした。一石一字塔は江戸時代に盛行したとか。



写真-9 一石一字塔

③ 下座場

石柱の背面にある名所旧跡案内の一つに「下座場」というのがあり、「藩主本多候が参勤交代の時など領民代表が土下座して送迎した処 北方百米因幡街道西側一段低い処」との説明が記されています。

損保川の堤防沿いに石柱から100mほど上流に行ってみると、堤防から80～90cmほど下がったところに南北約50m、東西5～6mの平地がありました。藩主を同じレベルから送迎するのはもってのほか、ということでしょうか。



写真-10 下座場跡（右手が損保川堤防）

上記の説明では「藩主本多候」となっています。山崎藩は、慶長20（1615）年5月に立藩した池田輝澄（姫路藩初代藩主・池田輝政の四男）が藩祖で、寛永17（1640）年に起きたお家騒動が原因で改易されるまで藩主を務めています。

延宝7（1679）年、6代目として大和国郡山藩より本多忠英（徳川四天王の一人・本多忠勝の血を引く）が1万石で入封し、以後本多氏が明治維新までこの地を治めています。

下座場で領民代表らが藩主の出発をお見送りしたり、帰国をお迎えしたりすることが始まったのが本多氏の頃と読めるので、下座場が設けられたのは延宝7（1679）年以降ということになります。

■ 芭蕉句碑の隣に「牛馬塚」

農耕作業や米、木材運搬などの力仕事に牛馬を使っていた時代、高瀬舟による舟運が発達していたとはいえ、舟が航行できるのは通常秋の彼岸から春の彼岸までで、それ以外は牛馬に頼るしかありません。

芭蕉の句碑の右隣に「牛馬塚」と刻まれた石碑が立っています。恐らく、川東道の「釜ヶ唄」のような危険な場所で重荷に足をとられてバランスを崩し川に転落するなどして哀れな最期を遂げた牛馬を供養するために建てられたものと思われます。

そういえば、「釜ヶ唄」から700mほど上流の奇岩で有名な「与位の洞門」（『ひょうご水百景』No.117参照）でも、洞門が掘られる以前は重い荷物を運搬する牛馬が転落死することがあったそうです。



写真-11 牛馬塚

■ モノローグ

前述のとおり、船元の渡し場跡付近に芭蕉の最晩年の句を刻んだ石碑が立っています。筆者はかねてから疑問に思っていたのですが、当地と何の関係もない句碑を建てて何の意味があるのでしょうか。

筆者は、令和6(2024)年の5月下旬に山形観光に行ってきましたが、その際に芭蕉ゆかりの地を訪れました。立石寺では、屹立する岩壁を見て「岩にしみ入る蟬の声」を想像し、日本三大急流の一つ・最上川の舟下りでは、ちょうど五月雨が降っていましたが、「五月雨をあつめて早し」というほど最上川の流れは速くは感じませんでした。

実際に句を詠んだ場所に立ってこそ、当時芭蕉が詠んだ情景のほんの一部でも味わうことができ、その地を訪れた甲斐があるというものです。



写真-12 立石寺開山堂

サツキ

ツツジ科ツツジ属に分類される常緑広葉樹の低木。別名、サツキツツジ(皐月躑躅)、映山紅(えいさんこう)とも呼ばれる。和名「サツキ」の由来は、他のツツジに比べ1ヶ月程度遅い旧暦の5月(皐月)の頃に一斉に咲き揃うところからその名が付いたといわれている。自生するものは一部地域の溪流沿いの岩の割れ目に根を張って生育し、増水時に水をかぶっても引っかからないような低い姿勢で生育していたものと思われ、いわゆる溪流植物の特徴を備える。水際に自生するだけに根が水に強く、加湿を嫌うツツジとは対照的である。旧山崎町の「町の花」だった。



写真-13 山崎陣屋跡に咲いていたサツキ

【参考資料】

- 1 『山崎町史』 山崎町史編集委員会編 昭和52年4月
- 2 『松尾芭蕉翁 最後の道行き 日想観』 ものづくりとことだまの国ブログ
<https://www.zero-position.com/entry/2019/07/09/000611>
- 3 『百花繚乱 “俳聖芭蕉を仰いだ人々” 近世播磨の俳諧』 姫路文学館編集・発行 平成17年4月
- 3 『一字一石経』 改訂新版 世界大百科事典
- 4 『松平康映、池田恒元、法華三部経、サツキ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：令和6(2024)年8月 『ひょうご水百景』No.203

改訂：令和8(2026)年8月 『ひょうご水百景』No.203